

日本近代経済社会の父

渋沢栄一

しぶさわ

えいいち



(写真) 古稀を迎えた渋沢栄一 (渋沢史料館所蔵)

経済は道徳より生じ、道徳は経済の働きによって発達する
道徳と経済とは一致すべきものである

栄一誕生

渋沢栄一は、天保11年（1840）2月13日、現在の深谷市血洗島に、父市郎右衛門、母えいの長男として生まれました。

栄一の生家は、農業・養蚕のほか、^{あいだま}藍玉の製造も行っていました。藍玉は、衣類を「武州紺」と呼ばれる鮮やかな紺色に染め上げる染料として人気があり、深谷もその生産地でした。

小さいころから頭がよく、好奇心旺盛だった栄一は、親戚知己の蔵書を片っ端から借りて読むほど読書に熱心でした。また、14歳の時には、家業の藍葉の買い付けなどに商才を発揮していました。

母のえいは、大変優しく慈悲深い人で、近所の病弱な人の世話も率先して行っていました。栄一の福祉・慈善事業への熱心さは、そんな母親の影響を受けたものともいえるでしょう。



（写真）生家「^{なかんち}中の家」

若き憂国の志士



（写真）^{あつただ}激論が交わされた惇忠の部屋

栄一が17歳の時、富農であった渋沢家は、時の領主から、500両の御用金を差し出すよう命じられました。父親の代わりとして代官所に出頭した栄一は、身分をかさにきた役人の傲慢な態度に正論で対抗しましたが、ひどい仕打ちを受けてしまいました。

その時栄一は、「あんなろくでもない人間が、ただ侍というだけで威張り散らすのは、結局、幕府が悪いからだ。階級制度が間違っているからだ。」との思いを強く抱きました。

こうした体制への反発心が次第に青年栄一を「世直し」の意識に駆り立てていきました。そして血洗島の片田舎ながら同志を募り、天下国家を論じていた24歳の時には、尾高^{あつただ}惇忠らとともに、高崎城乗っ取り、横浜焼き討ちという一大攘夷計画を企てたほどでした。もし、この計画が実行されていたら、その後の栄一の偉業はなかったでしょう。

ヨーロッパへ

元治元年(1864)、一橋家の重臣・平岡円四郎の勧めで、一橋慶喜(後の徳川慶喜)に仕官することになりました。栄一は、ここでも歩兵の募集、新しい事業の運営など、その才覚を生かしみるみる頭角を現わしました。

その後幕臣となり、慶応3年(1867)、將軍徳川慶喜の名代としてパリ世界大博覧会に出席する徳川昭武(14歳)に、庶務・会計係として随行しました。

ヨーロッパ滞在は約1年間でしたが、ちょんまげを切り、洋装に変え、持ち前の旺盛な好奇心を発揮し、議会・取引所・銀行・会社・工場・病院・上下水道などを見て回りました。

この時、栄一は、進んだヨーロッパ文明に驚き、また、西欧社会の人間平等主義にも感銘を受けました。このヨーロッパ視察が、栄一の人生を大きく変えたのです。



(写真) 断髪洋装の栄一



(写真) 徳川昭武パリ万博一行

大実業家・渋沢栄一



(写真) 第一国立銀行

栄一は、明治2年、明治政府の高官大隈重信の強い説得で大蔵省に出仕し、税制、貨幣、銀行などの国家財政の確立に取り組みます。

しかし、官界の硬直した体制に限界を感じた栄一は、大蔵省を4年で辞め、実業界へ転身し、ヨーロッパで学んだ知識を生かして第一国立銀行をはじめ、営利企業約500社の設立に関与しました。

栄一の生涯を通じての基本理念は、「論語」の精神(忠恕の心=真心と思いやり)にあり、単なる利益の追及だけでなく、「道德経済合一説」による日本経済の発展でした。ここに栄一の偉大さがあるのです。

渋沢栄一が関係した主な企業(現存する企業は現在の名称で表記)

(株)みずほ銀行、東京海上火災保険(株)、王子製紙(株)、東日本旅客鉄道(株)、日本郵船(株)、東京ガス(株)、日本煉瓦製造(株)、清水建設(株)、(株)日本経済新聞社、(株)帝国ホテル、川崎重工業(株)、太平洋セメント(株)、サッポロビール(株)、アサヒビール(株)、東宝(株)、秩父鉄道(株)、(株)埼玉りそな銀行

恵まれない人々に手をさしのべて

栄一は、実業界の中で社会公共事業に最も熱心だった一人で、彼が関わった事業は600余に及びました。

中でも35歳の時に設立した東京市養育院では、92歳の天寿を全うするまでの56年間も院長を務めました。また、貧困者の救済や療養、幼少年の矯正等、日本の福祉活動の基盤を築きました。

こうしたヒューマニズムの精神は、栄一の生涯を貫いた論語の教えのほか、母親えいの影響もあるものと思われます。

栄一は、実業教育も重視し、東京商法講習所の経営に尽力しました。これは東京高等商業学校(後の一橋大学)に発展しました。

また、女子教育にも力を入れ、女子教育奨励会(後の東京女学館)や日本女子大(後の日本女子大学)の設立・運営を援助しました。



のぶひと
(写真) 東京市養育院巣鴨分院を訪問された高松宮宣仁親王殿下とともに

栄一と青い目の人形



(写真) 答礼人形送別式典

昭和に入り、日本とアメリカの関係が悪化してきたことに心を痛めていた栄一のところに、かねてから親交のあったニューヨークのギュリック博士から、人形による国際交流を行い日米友好を図りたいという依頼がきました。

栄一は、すぐに外務省や文部省と連携して「日本国際児童親善会」を組織し、その受入窓口を整えました。そして、アメリカ側から12,739体の「青い目の人形」が届き、昭和2年3月3日の節句に盛大な歓迎式典が行われました。

このアメリカ人形は全国各地の国民学校に贈られ、大歓迎を受けました。後に日本側から返礼として58体の日本人形がアメリカへ送られました。「青い目の人形」は、現在、埼玉県内の小学校などに12体(全国で270体余)が保存されています。

このように、栄一は国際親善にも大きな功績を残しています。

渋沢栄一年譜

	年齢 (数え年)		年齢 (数え年)	
天保11年 (1840)		●2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島(現深谷市)に市郎右衛門、えいの長男として生まれる	明治18年 (1885)	46 ●東京府の経営廃止条例の決定により、東京養育院の存続に努力する
安政 5年 (1858)	19	●尾高惇忠の妹ちよと結婚	明治29年 (1896)	57 ●第一国立銀行が株式会社第一銀行となり、その頭取となる
文久元年 (1861)	22	●江戸の海保塾や千葉道場で文武の道を学び、天下の志士と交わる	明治33年 (1900)	61 ●男爵を授けられる
文久 3年 (1863)	24	●高崎城乗っ取りを計画するが、尾高長七郎(惇忠の弟)の説得により中止	明治35年 (1902)	63 ●アメリカ及びヨーロッパ諸国を兼子夫人と共に訪問し、国際親善に努める
		●渋沢喜作と共に京にのぼる	明治42年 (1909)	70 ●金融機関以外の事業会社(約60社)の役員を辞任する
元治元年 (1864)	25	●一橋家の用人平岡円四郎のはからいで喜作と共に一橋家に仕官する	大正 3年 (1914)	75 ●駐日実業株式会社の設立を機に中国を視察し親善に努める
慶応 3年 (1867)	28	●将軍徳川慶喜の弟昭武に従いフランスのパリ万博に随行	大正 4年 (1915)	76 ●パナマ運河開通記念博覧会の見学をかねて日米親善のため渡米する
明治元年 (1868)	29	●フランスより帰国。一時静岡藩に仕える	大正 5年 (1916)	77 ●第一銀行頭取をはじめ金融界からも引退し社会公共事業に尽力する
明治 2年 (1869)	30	●明治新政府に仕官。租税正となる	大正 9年 (1920)	81 ●子爵を授けられる
明治 6年 (1873)	34	●大蔵省を辞任し、第一国立銀行総監役となる	大正10年 (1921)	82 ●ワシントン軍縮会議の視察をかねて渡米し平和外交を促進する
		●わが国最初の洋紙製造会社(抄紙会社)の創立を指導、明治政府を退いてからは事実上の社長として尽力する	大正12年 (1923)	83 ●関東大震災が起こり、大震災善後会副会長となる
明治 9年 (1874)	37	●東京府養育院の事務長となる	大正15年 (1926)	87 ●白河楽翁公(松平定信)を記念し、東京市養育院長として第17回目の祭典を行う
明治11年 (1878)	39	●東京商法会議所・東京商工会・東京商業会議所の会頭をつとめる(～明治38年まで)	昭和 2年 (1927)	88 ●日本放送協会(NHK)の顧問となる
明治12年 (1879)	40	●前アメリカ大統領グラント将軍の歓迎会を行う	昭和 4年 (1929)	90 ●日本国際児童親善会会長として、日米の人の形の交換に尽力する
明治15年 (1882)	43	●妻ちよ死去	昭和 5年 (1930)	91 ●宮中に参内、御陪食の光栄に浴する
明治16年 (1883)	44	●伊藤兼子を妻に迎える	昭和 6年 (1931)	92 ●救護法の実施について政府に働きかける
				●11月11日午前1時50分永眠